

◆ J. C. バッハ シンフォニア ト短調 op. 6-6

ヨハン・クリスティアン・バッハは、かの有名なヨハン・ゼバスティアン・バッハの11人目の息子として、1735年ライプツィヒに生まれた。クリスティアンが生まれたとき、父ゼバスティアンは50歳。遅くに生まれた子どもだった。

ヨハン・ゼバスティアン・バッハには子どもが20人いた。ただし成人したのは、そのうち10人。うち4人は女の子。よく目にする「バッハの息子たち」というくくりは、残りの6人を指すことが多い。クリスティアンはその中の末っ子である。

彼は、モーツァルトに大きな影響を与えた人物として有名である。1764年、クリスティアンは当時8歳だったモーツァルトと出会う。2人は一緒にクラヴィアを演奏し、フーガを作曲するなど、親しく過ごし、その後モーツァルトはクリスティアンの影響が濃くにじむ作品をたくさん作曲した。モーツァルトの交響曲第25番に、今日演奏するシンフォニア op. 6-6 (1770年出版) の影響を認める人は多い。

またクリスティアンには興行師としての資質もあった。王室音楽師の仕事で多忙な中にも、友人と公開演奏会を企画・実施。没年まで継続して主宰している。そして、困っている音楽家の友人のために演奏会を企画することにも積極的だった。

そんなクリスティアンの生前のエピソードからは、サービス精神旺盛で、陽気でやさしい人柄がうかがえる。彼がシャーロット王妃に協奏曲を献呈した際、最後の曲の最終楽章をイギリス国歌「ゴッド セイヴ ザ キング」の変奏曲にしたのは、彼ならではのサービス精神のあらわれだろう。

兄カール・フィリップ・エマニュエル・バッハは、弟クリスティアンの音楽について「耳を満たしてくれるが、心を満たしてはくれない」とコメントしている。実際、音楽事典や音楽史の本をひもとくと「耳当たりは良いが深いあじわいはない」「名声を得たが音楽的には一流ではない」という評価が多く散見される。どうなのだろうか。

彼の作品の特徴としては、明るく澄んだ響き、優美で流れるような旋律、軽やかなリズムが挙げられる。しかし今日演奏するシンフォニア op. 6-6に、それらの特徴はあまりあてはまらない。激しくドラマティックな表情、はりつめた緊張感、風のような疾走感をもつ両端楽章と、シンプルで清潔な美しさをもつ第2楽章から成る。

今日は交響曲3曲から成る演奏会となった。シンフォニアとシンフォニーはどう違うのか、と疑問に思う方もいらっしゃるかもしれない。「シンフォニア」とはイタリア語で「sinfonia」。語源はギリシア語の「syn」（一緒に）、「phōnē」（響く）から生まれたラテン語の「symphonia」である。これはルネサンス後期から使われてきた音楽用語で、当初は広く器楽合奏の曲を意味していたが、クリスティアンが活躍する少し前、18世紀初頭から、意味が次第に狭まり、3楽章から成る、オペラの序曲を意味するようになっていった。そして18世紀中甸からは、オペラ序曲という意味は薄れ、4楽章から成る、演奏会用交響曲という意味として使われることが多くなっていく。クリスティアンはその端境期にいた。彼が残した交響曲（sinfonia）は、いずれも当時のオペラの序曲の様式、急→緩→急という3楽章形式を踏襲している。彼は4楽章形式の交響曲は一曲も書かなかった。しかし主題や展開の多様さから、彼が「sinfonia」を、演奏会用の交響曲として、オペラの序曲とは区別して書いていたことが指摘されている。

今日はシンフォニアの形式がもつ簡素な美しさと、明るく美しい曲をたくさん残したクリスティアンの例外的な短調の響きを、味わっていただければ幸いである。彼は生涯で交響曲を40曲残したが、短調の交響曲は、唯一この曲だけなのである。

(S.H.)

◆ モーツァルト 交響曲第39番 変ホ長調 KV. 543

モーツァルトは1788年の初夏に、6週間という短い期間でいわゆる『3大交響曲』を書き上げた。今回演奏する変ホ長調がその第1番目にあたり、1788年6月22日の日付でモーツァルトが自身でつけていた作品目録に記載されている。続くト短調は7月25日、そしてハ長調、いわゆる『ジュピター』は8月10日の日付で記載されている。この日付だけを見ても3曲が一气呵成に作られたことは間違いないが、このように驚くべき作曲のスピードにもかかわらず、3曲それぞれが非常に対照的なキャラクターによって見事に描き分けられている点には、ただただ感服するほかない。まさに天才モーツァルトのなせるわざである。また、この3曲は個々の作品としてだけでなく、3曲でひとつの大きなまとまりを形成していることも注目に値する。すなわち、この変ホ長調交響曲に見られるような序奏が、ト短調およびハ長調には見られないこと、そしてハ長調交響曲の終楽章には、変ホ長調にもト短調にも見られない壮大なコーダが付されていることで、序奏とコーダの間に3つの交響曲がはさまれているという、なんともスケールの大きな構成が浮かび上がってくるのである。さらにこの3曲が短期間に仕上げられたことを踏まえれば、モーツァルトがこの3曲を意識的にひとつのまとまりとして作り上げようとしたのではないだろうか、ということが容易に想像できるのである。また、このように大きなまとまりで考えれば、この変ホ長調交響曲が他の2曲にはないやけに立派な序奏を持っていることにも、そして終楽章があっさりと終わってしまうことにも頷けるのである。

*

さて、そのような『3大交響曲』の第1作目にあたる変ホ長調交響曲だが、モーツァルトの『白鳥の歌』としばしば呼ばれることからわかるように、全体を通して美しい旋律に溢れている。月並みではあるが、仮にト短調を『悲嘆』、ハ長調を『勇壮』とでも名づけることができるとすれば、この変ホ長調にはまさに『優美』という言葉がふさわしいように思われる。もちろん美しいのは旋律だけではない。ハーモニーの甘く、暖かい響きもこの曲の大きな魅力であろう。その点において、モーツァルトがこの曲でオーボエの代わりにクラリネットを採用した効果は大きい。そして、これらの美しさを際立たせているのが、とめどなく流れゆく音楽の素朴なつくりであろう。遮る物もなくいわば淡々と進む音楽が、聴く者に絶え間ない心地よさを与えるのである。

第1楽章 Adagio - Allegro

上に述べたように、『3大交響曲』全ての幕開けを告げるであろう荘厳な序奏は、絶え間ない付点のリズムと、流れ落ちるような下降音階によって縁取られている。この下降音階は、各楽章の要所で姿をあらわし、交響曲全体に統一感と落ち着きを与えている。3拍子のアレグロは、美しく滑らかな第一主題および第二主題と、その間を縫う凛々しい経過句（まるでベートーヴェンの『英雄』を思わせる）との対照が印象的である。

第2楽章 Andante con moto

素朴でありながら、この上なく美しい緩徐楽章。少ない素材の魅力が随所で最大限に活かされている。

ちなみに、ボッセ氏曰く、かのアーノンクールがシュピーゲル誌のインタビューで「モーツァルトはわれわれにただ天国を見せるだけではない、彼はわれわれに地獄を見せることもできる」と語っていたのだという。この第2楽章もただ美しいばかりではない。織り込まれた劇的な部分によって全体の美しさがより際立たされているのである。

第3楽章 Menuetto: Allegretto - Trio

リズムカルなメヌエットと、対照的な流れるようなトリオ。トリオの優雅なクラリネット2重奏は、この楽器が選ばれた必然性

を感じさせる。

第4楽章 Allegro

生き生きとした旋律が終始軽快に駆け抜ける。最初の動機が一貫して使用され、躍動感に満ちたフィナーレとなっている。

*

『3大交響曲』が書き上げられた翌年、1789年6月12日火曜日のことである。ライプツィヒのゲヴァントハウスでオール・モーツァルト・プログラムのコンサートが行われた。これは、モーツァルトがプロイセン国王を訪ねてベルリン滞在のさなかに立ち寄ったライプツィヒでの要望に応えたものであったらしい。「収入ときたらみじめの至りだった」が、「拍手や賞賛という点ではこのコンサートは全くの大成功だった」とモーツァルトはウィーンで待つ妻コンスタンツェに書いている。コンサートのチラシによれば、プログラムは「第1部 交響曲、シェーナ（コンサート・アリアのようなもの）、ピアノ協奏曲、交響曲。第2部 ピアノ協奏曲、シェーナ、ピアノのための幻想曲、交響曲」となっており、そのすぐ下に「全ての楽曲はモーツァルト氏の作品からなるものである」と書かれている。しかしながら、どの交響曲が演奏されたかについては記録が残っておらず、全く不明である。もしかしたらひとつの交響曲が切れ切れに演奏されたのかもしれないし、いくつかの交響曲からの抜粋であったのかもしれない。資料がない以上憶測の域を出ないが、この演奏会で『3大交響曲』が一挙に演奏され、喝采を浴びたと考えてしまうのは勝手過ぎるだろうか。確実な証拠がないために、『3大交響曲』はモーツァルトの生前には演奏されなかった、と従来は言われてきたが、このような形で演奏されていた可能性は十分にあるのである。

(W.N.)

◆ ベートーヴェン 交響曲第2番 ニ長調 op.36

第26回定期演奏会では、ボッセ氏指揮により交響曲第1番を演奏したが、本日の演奏会では続く交響曲第2番を取り上げる。

この曲のスケッチを始めた頃から、ベートーヴェンの生活は経済的にかなり順風に乗り始めていた。1800年以降、カール・リヒノフスキー侯爵から年金を受けられるようになったし、楽譜の出版の見通しもつくようになっていた。また、1799年5月にはブルンスヴィク家の令嬢テレゼとその妹のヨゼフィーネが、1800年には従姉妹のジュリエッタ・グィチアルディがベートーヴェンに弟子入りし、ベートーヴェンの周辺がにわかに華やいできたのも、この頃である。ジュリエッタは月光ソナタの献呈を受けた女性でもあり、この頃のベートーヴェンの作品には、当時のベートーヴェンの明るい感情の影響が見受けられよう。

しかし時を同じくして、深刻な難聴の兆しがベートーヴェンを襲う。ベートーヴェンが自分の聴覚の異常に気付いたのは、1798年頃とされている。ひそかに様々な治療を受けたが、効果はなかった。悪くなる一方の聴力にベートーヴェンは深く思い悩み、難聴による苦痛を和らげるため、1802年5月から10月まで、自然に恵まれた静かな美しいハイリゲンシュタットでの静養を試みる。

そして1802年10月6日、あの有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」が書かれたのである。この遺書は、ベートーヴェンの弟達に宛てられたもので、自殺まで覚悟したという当時の悲痛なベートーヴェンの心情をよく伝えている。しかし、この「ハイリゲンシュタットの遺書」は普通の遺書とは異なる面も持っていた。「死から私を引き止めたのはただ芸術である。私は自分が果たすべきだと感じている総てのことを成し遂げないうちにこの世を去ってゆくことはできないのだ」という一文が示すように、死の覚悟よりも、むしろ、生への意欲を示しているとも言えるのである。まだ32歳前という若さ、芸術への強い意欲や、捨てきれない女性への感情が、ベートーヴェンに生きるという決心をさせたのだろうか。「不幸について考えないようにする一番良いことは、仕事に熱中することだ」とも書かれており、ベートーヴェンは不幸に対する反作用を見せたのだった。このような状況で作曲された交響曲第2番は、人間らしい愛情と、苦悩の先にある希望を信じる心とが完成させたと言えるのではないだろうか。

交響曲第1番は105番目のハイドンの交響曲とも言われるが、この第2番は楽器の用法に飛躍的な進歩が見られる。また、ベートーヴェンの独自性や、以降の作品の萌芽を数多く見ることができる。

第1楽章 Adagio - Allegro con brio

交響曲第1番同様、穏やかな序奏で始まるが、前作より長く充実し、深い内容と豊かな感情に満ちている。主部はチェロとピオラの低音でのユニゾンという異例の始まり方である。これに上行、下行の分散和音による装飾が反復され、発展する。第2主題は、クラリネット、ファゴット、ホルンによる豊かな響きで軽快に提示される。

第2楽章 Larghetto

主題が非常に美しい。また、木管楽器の用法に斬新さが現れており、これまで響きを支える役割が主であったクラリネットに大きな役割を与えているのも特徴である。

第3楽章 Scherzo: Allegro - Trio

トゥッティの強奏で開始される。ダイナミクスとスタッカートを巧みに利用して、スケルツォの性格を決定づけている。中間部は木管のコラールに始まり、主部とのコントラストを示している。

第4楽章 Allegro molto

エネルギーに満ち溢れた楽章である。前打音のように始まるリズムとトリル装飾により大きな跳躍感をもつ冒頭主題動機は、6小節という非楽節的構造をとり、新しい音楽を求めるエネルギーを強く感じることができる。この主題は第1楽章序奏部開始と同じコンセプトを持っており、主題による全曲統一の試みがなされていると言えよう。フィナーレへの期待は何度も裏切られるが、最後は圧倒的なコーダで締めくくられる。

(T.S.)